

鳩間島、黒島所在・由来の三線

園 原 謙

The Trace of *Sanshins* in Hatomajima and Kuroshima Islands

Ken SONOHARA

鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書、沖縄県立博物館・美術館 別刷

2016年3月11日

Reprinted from Survey Reports on Natural History, History and Culture of
Hatomajima, Aragusukujima, Kuroshima Islands, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum

March, 2016

鳩間島、黒島所在・由来の三線

園 原 謙*

The Trace of *Sanshins* in Hatomajima and Kuroshima Islands

Ken SONOHARA*

はじめに

鳩間島・黒島は八重山諸島内でも鳩間節、黒島口説など八重山地方を代表する歌謡の舞台となった島である。歌謡にとって、伴奏楽器としての三線は不可欠である。彼の地の華やかな豊年祭などで用いられる実用品としての三線の存在に注目することにした。

歌・三線演奏のベテラン、得意とする方々が集落ごとにおり、豊年祭などの祭祀行事においても活躍する。彼等はよく鳴る三線を所蔵していることが多い。それもいくつか持っている場合がある。

本稿ではこの2つの島に所在する三線の実態とどのような由緒や伝来をもっているかについての聞き取り調査と実物資料の記録撮影を目的とする。調査にあたり、いくつかの仮説を考えた。ひとつは、歴史的にはもともと王国時代、旧士族を中心に所持したのが三線である。そのため、本島から遠く離れた八重山地方には、明治以前の古い三線はあまり存在しないのではないかとする考えである。もちろん後の時代に移入された可能性を否定するものではない。2つ目は、廃藩置県以降に伝播していった三線があるのであれば、どのような形で、「芸能の島」とされる八重山地方で伝播し、普及していったかについてである。それらを三線に係る伝承で知りえるのではないかと考えた。さらに3つ目は、二つの島に所在する三線の形態的特徴を通して、同地の人々

が嗜好する型を確認することであった。それら3点を念頭に鳩間島・黒島に所在・由来する三線について論じることにする。

三線調査の研究史と本調査の方法

7つの型の三線があるにもかかわらず、沖縄県内に所在する戦前の古三線を調査した結果、全般的にいえることは真壁型と与那城型のように多くの人々に嗜好される型があることである。周知のとおり沖縄における三線は、音曲を奏でる実用楽器であるとともに、美術工芸的な価値を有するものでもある。そのため、全国的にも稀であるが三線は工芸品として文化財指定されており、その件数は平成26年度末現在で24挺^(註1)ある。

沖縄の三線の形態的特徴は、大きく7つの型に分類され、製作者の名字に因み、古い順に南風原型、知念大工型、久場春殿型、久葉の骨型（久場春殿による）、真壁型、平仲知念型、与那城型^(註2)とされる。

これまでの三線調査の歴史を振り返ると、本格的な調査は1952（昭和27）年に池宮喜輝が行ったハワイ、ロサンゼルスに移民地をはじめ本土、沖縄本島での調査を嚆矢とする。池宮が内外の沖縄伝統音楽家らの協力をえて、戦前流出した沖縄の三線の悉皆的な調査^(註3)を行った意義は大きい。型分類などの目利きは池宮自身の審美眼によって行われた。そのため型分類の基準を客観的に評価する上では若

※ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

* Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha city, Okinawa Prefecture 900-0006 JAPAN

干の問題があった。その問題点を解消するために、より多くの目で、型分類の客観化をはかるために1986（昭和61）年に琉球三線楽器保存育会（初代会長宮里春行）が発足した。当時、沖縄県立博物館（首里時代）の支援によって、鑑定場所を提供し活動を重ね、現在まで続いている。博物館では月1回の三線鑑定会が開催され、型分類の定型化が図られるようになった。そのノウハウに基づいて、1990（平成2）年～1993（同5）年まで文化庁補助事業として、県内の悉皆調査として「琉球三味線楽器所在調査」が行われ、本島北部、中部、南部、宮古、八重山を含む地域で612挺の戦前製作の三線を調査し、調査結果を報告書『沖縄の三線』（沖縄県教育委員会、1995）で紹介した。また、戦後間もなく行われた池宮以降の移民社会における三線の実態を把握するため、筆者による「ハワイに所在する三線」（園原、2000）の報告や、2013年度博物館企画展「三線のチカラ形之美と音の妙一」（平成24年2月18日～5月11日）の開催にあたり、ハワイからの里帰り三線を展示するための事前調査として2012年12月にハワイ現地で40挺あまりの三線調査を行い、うち同展では8挺の戦前ハワイに渡った三線を借用し展示するなどの活動があった。

さて、過疎化する2つの島での三線の所在確認調査は、ハワイ以上に難しかった。三線はそれを演奏する目的で所有するか、または演奏はしないが祖先伝来の家宝^{（註4）}として保管する人によって各家で管理されている。過疎化に晒される2つの島にとって、居住者が少ないことは、すなわち三線そのものの数がきわめて少ないことを意味する。そこで今回の調査では、当該島に実際に所在する三線に加え、かつて当該島にあったとされる三線を当該由来の三線と規定して調査することにした。

その結果、鳩間島所在・由来の三線7挺、内訳は鳩間島所在で4挺、鳩間島出身で石垣島に居住する人が所有する三線3挺を調査した。一方、黒島においては、現地で実際調査ができた三線は1挺のみで、沖縄本島居住の黒島出身者が所有する三線を黒島由来の三線とした2挺を含め、合計3挺を調査した。今回の両島の調査では10挺を確認したが、10挺のみしか存在しないという意味ではない。ただ、島の過疎化による人口減少は深刻で、島に所在した動産

的文化遺産が当該島から流出し、少なくなっている実状がある。

調査の方法については、三線調査カードに基づき、型名の分類、各部位の長さの測定、胴内の状況の確認、所有者が知りうる由緒伝来の聞き取りを行った。また、三線の正面、側面、鳩胸、心と各部位を撮影し、図版として記録することとした。また、各家の三線名称は、所有者の苗字または屋号に三線の型名を付して、名称とした。

鳩間島における調査では、平成25年6月25日に鳩間区長らの協力を得て、公民館に資料を運んでもらい調査を実施した。また、翌日には、石垣在住鳩間島郷友会の方のご協力をいただき、古三線を所蔵する各家を廻って調査を行った。一方、黒島での調査は平成27年4月16日に、本島居住の黒島出身者が所有する三線2挺は平成27年11月4日に当館に持参いただき調査をさせてもらった。

表1は今回、鳩間島・黒島所在・由来の三線として調査した資料一覧である。また、調査した三線の図版は図1から10までとして、原則全体姿（斜め45度）、側面、天及び心部分の4点の写真で構成した。

三線胴皮（紙）張りの製作技術の伝承

黒島の現地調査において、黒島唯一の博物館施設の黒島研究所^{（註5）}で展示されていた「三線保存用」とされる荒焼大甕の存在を確認したことは大きな収穫であった（図11参照）。この甕は、口の内径が240mm、外径が300mm、高さが890mmで、その使用法は同研究所の説明によると、「胴の（皮紙）部分を張り替えたばかりの三線を保存するため」のものとされる。毎年催される結願祭などの行事の前に三線の胴が張り替えられる。書き損じた紙や古い紙（和紙）を芭蕉の渋汁を塗って、貼り重ねの作業を数回繰り返し、紙による胴張りがされる。胴が新調された三線は、底に水を張ったこの甕にいれ、ゆっくりと乾燥させた、という。当時の紙とは和紙のことをさし、現存する古文書の紙質から推察すると、楮紙や芭蕉紙だと思われる。

三線の胴（チーガ）は円形状で直径180mm程度、上下の幅（厚み）は120mmの大きさである。幅広

図版	島	名 称	棹の各部位の法量 (cm)				爪裏 ノミ型	材質	保存状態	由緒・伝来等
			全長	野	心	糸藏				
1	鳩間	大城の真壁型	78.8	47.8	21.5	3.4	角ノミ総取り	クルチ (白太あり)	天の裏側に漆剥離。チーガの差し口が大きいので、5mmの厚みの歩当がされる	母方の祖父愛用三線。祖父は豊年祭で地方を務めるほどの腕前の持ち主。入手方法は不明。推定製作年：大正～昭和前期
2	鳩間	米盛の真壁型	78.8	48.4	21.9	3.4	角ノミ総取り	クルチ (白太あり)	カラクイがすべて異なる。男絃のカラクリの花形の象牙欠。猿尾に1.5cmのクルチ材が釘で接がれる。	復帰後那覇で入手したもの。従業員からもらったという。推定製作年代：戦後
3	鳩間	ユーレー（寄合）の真壁型	78.8	48.8	21.6	3.2	丸ノミ平取り	クルチ (白太あり)	カラクイが女絃と中絃は古い。男絃は新しいカラクイ。猿尾に1.5cmのクルチ材で釘で接がれる。	元々の現所有者の祖父。その由緒来歴は不明。推定製作年は明治～大正期
4	鳩間	浦崎の真壁型	77.4	47.7	21.2	3.2	丸ノミ総取り	ユシギ	カラクイの男絃の飾り欠	心の右側に新栄堂の紙札が貼られる。製作年：戦後（平成4）
5	鳩間	鳩間屋の真壁型	79.2	48.2	21.5	3.7	角ノミ総取り	クルチ	良好	所有者の父が所有していた三線。西表島のクルチで造られたという。地元ではなく、本島で作ったのではないかとされる。推定制作年：大正～昭和前期
6	鳩間	トムレー（友利）の真壁型	78.3	48.1	22	3.4	角ノミ総取り	クルチ	黒島出身の三線職人（那覇在）に依頼し、20年前に塗替。チーガも新調したが、棹が間違えられないようにした。塗り替へは塗り剥げが原因で、音に雑音が生じたため。	祖父がもっていたもので、家宝として長男が継承すべきだと考える。推定製作年：明治～大正期
7	鳩間	ウイカナケーの真壁型	80	48.5	20.8	3.7	角ノミ総取り	クルチ	良好	明治23年生まれの祖父が愛用していた三線。祖父は、王国末期、石垣の役人と鳩間の人の間に生まれた。鳩間島で旗頭の保管を行う由緒ある家。「兄弟三線」があり、本島に所蔵者がいるという。幼い頃から泣くと、祖父の三線を聞かされたという。製作推定年：明治期
8	黒島	島仲の真壁型	—	—	—	—	—	クルチ	良好	製作推定年：戦後
9	黒島	ニシトミヤ（北當山）の真壁型	77.2	48	21.5	3.4	丸ノミ総取り	クルチ	良好、現所有者が昭和54、55年に塗替えた。カラクイは総入れ替え。猿尾に8mmの象牙が接がれる。材質はクルチのウズラ目で、黒島産だという。その質感がでるようスンチン塗り。元々は黒漆塗りだった。No10とは夫婦三線。	黒島で散髪屋をしていた船道という職人による製作とされる。明治31年生まれの父親の形見で、前所有者は大正年間には、黒島を代表する三線の地方で（ジーボー）活躍した人であった。地域の三線製作技術を知るうえで貴重である。製作推定年：大正期
10	黒島	ニシトミヤ（北當山）の真壁型	78	48	21	3.4	角ノミ角取り	クルチ	良好、現所有者が昭和54、6年頃に塗替えた。カラクイは総入れ替え。材質はクルチのウズラ目で、黒島産だという。その質感がでるようスンチン塗り。元々は黒漆塗りだった No 9 とは夫婦三線。	黒島の慶世村という職人による製作とされる。慶世村はその後石垣に出て、三線製作者として有名になる。本三線のカラクイのうち女掛籠と中掛籠の間隔が若干狭いが、糸藏上側の加工の仕方に古い形が確認される。明治31年生まれの父親の形見で、前所有者は大正年間には、黒島を代表する三線の地方（ジーボー）で活躍した人であった。地域の三線製作技術を知るうえで貴重である。製作推定年：大正期

表1 鳩間島・黒島所在・由来の三線一覧



図1 大城の真壁型



図2 米盛の真壁型



図3 ユーレー（寄合）の真壁型

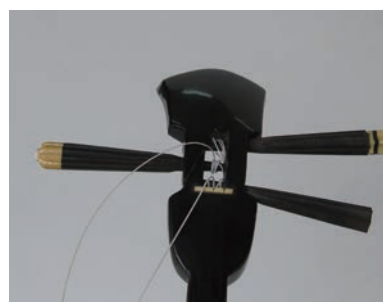


図4 浦崎の真壁型



図5 鳩間ヤーの真壁型

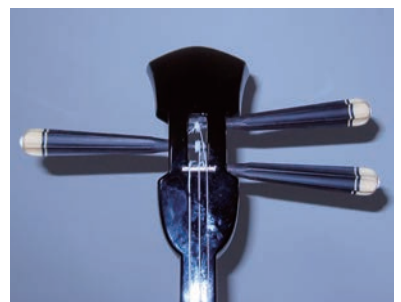


図6 トムレー（友利）の真壁型



図7 ウイカナケー（上兼久）の真壁型



図8 島仲の真壁型



図9 ニシトミーヤ（北當山）の真壁型



図10 ニシトミーヤ（北當山）の真壁型

の大甕の口は、三線の出し入れが十分にできる。甕の底に付かないよう棹の上部を支柱棒で縛り、甕の中では三線は宙に浮いた状態になっている。甕内は適度な湿度状態で渋張りの紙がゆっくり乾燥でき、祭祀に際しての三線楽を奏でることができるのだろう。三線胴紙を乾燥させるための甕というよりは、便宜的に水を蓄えたりする大甕が流用されたものと思われる。

慢性的に物資が不足する島の社会において、使い古された紙、いわゆる反古紙ですら貴重なものであったと思われる。一年に一回の結願祭に備えて三線胴の紙による胴張りを新調する。紙張胴の寿命は1年程度であったのか、それとも毎年新調することに民俗学的な意味があるのかを含めて検討する必要があるが、渋張り胴三線の製作に関わる先人の智慧が垣間見られる。

三線に胴皮として使用される蛇皮は、王国時代から東南アジア産のニシキヘビを用いている。当時から輸入品であったため、蛇皮は高価であった。そのため、戦前までは地方では「蛇皮線」ならぬ「紙皮線」（紙による胴張り）が使用されることが一般的だったと思われる。和紙に柿渋や芭蕉渋汁を塗って、接着剤代わりに紙を重ね、紙質を強化して、蛇皮の代用品として用いたのである。筆者が三線職人から聞き取り調査したもので、戦前製作された渋張り三線があるが、この場合には和紙を豚血で数枚接着し、スックイとよばれるデンプンで胴枠に接着したという。また、湿気除けと防水を兼ねて、生漆を塗って、強化したものがある。

1900（明治33）年には、少なくとも「シブ（渋）張」胴^{（註6）}の三線の存在が確認される。「三味線大工の同盟」、今流に言えば三線製作者組合で、その三線製作の手間賃に関わる賃金表が琉球新報に広告されている。同表では胴の製作にあたって、蛇皮張の手間賃だけで40銭に加え、「上等シブ張20銭」、「同中18銭」、「同下16銭」と渋張りの張り方について「上中下」とランク付けがされている。張り方の手法や材質による差異なのかは不明であるが、いずれにしても、その渋張り製作技術の方法のひとつが島に伝承されていることは興味深い。

一定の湿度を保たせながら、乾燥させることは、漆芸品の乾燥にも用いる方法である。漆を塗った器

物を入れ、湿度を保って乾燥させる室を「漆風呂（うるしぶろ）」というが、この原理と同様に三線の渋張りの胴は乾燥させられたことになる。渋張り胴がどの程度の強度と耐久性があるのかについては実験などで試みる必要があり、このことは今後の課題としたい。

戦前、一般的であった渋張り胴の三線については、名称としては確認できたが、その具体的な技術・技法については現在の三線職人の間でも伝承が途絶え、確認することが困難な状況にある。物資不足の離島において、実用的な技術として継承されており、大甕が三線胴皮の乾燥のために使用された伝承と用具を確認することができた収穫は大きい。

まとめにかえて

本稿では沖縄を代表する楽器であり、家宝であり、工芸品として各家に継承される文化遺産三線について、芸能の宝庫といわれる八重山諸島の鳩間島と黒島に限定して、現在両島に所在、由来する三線を対象に調査したが、残念ながら悉皆的な調査にはなっていない。



図 11 渋張りの新調の胴紙を乾燥させるための水甕（黒島研究所蔵）

その前提に立ち、今回の調査では合計10挺の三線を調査した。内訳は鳩間島が7挺、黒島が3挺であった。

鳩間島での調査では島内4挺、島外3挺を調査した。その三線型は7挺とも真壁型であった。製作についての聞き取り調査に基づくと、鳩間島には三線製作者がいなかったとされることから、沖縄本島で製作されたものを買収求めたものとされる。一方、黒島では三線製作者がいたとされる。慶世村（きよむら）や船道（ふなみち）という職人がおり、地方の職人の手による三線が2挺確認された。これらの三線の元々の所有者はすでに亡くなっているが、伝承として確認される部分については要約し、表1の備考に記した。

結果として、鳩間島民が嗜好する三線型は真壁型になる。ただ、調査では島内においては真壁の正型といわれる形なるものがあるが、その形を保ったものが2挺、真壁型としての天、野、鳩胸、心の各部位の不統一のものが2挺あった。またこれら三線の製作時期については、戦前に製作されたものが3挺、戦後のものが1挺と推察される。

豊年祭の祭祀などにおける使用頻度が高かったためか、すべての三線においてカラクイ（範）の破損が目立ち、3本のカラクイが同一タイプのものは殆どなかった。また、石垣島に居住する鳩間出身者が所蔵する3挺の三線は、鑑定や伝承を加味すると、少なくとも明治期～大正期の時代のものと推察される。それらの型はすべて真壁型で正型として確認されるものであった。

一方、黒島の三線調査では、事前情報で、島内所在の数挺の三線を確認し、実際調査を試みようとしたが、結果的には島内では1挺しか調査ができなかった。同三線は真壁型で製作年代は戦後のものと推察される。また、沖縄本島に移り住んだ黒島出身者が所有する黒島由来の三線2挺を調査することができた。島外の三線2挺も真壁型で、製作年代は伝承によると、前所有者が地方（ジープー）として活躍した大正期頃の作と推察される。とりわけ、黒島製の三線のうち1挺の棹は黒島に居住し、後に石垣島に移り住み、石垣地方では三線製作者として名をあげたとされる三線職人慶世村の手によるものである。真壁型の細棹で優美なフォルムは、地方作にお

いても型の正型が整えられ、爪裏ノミ型も詳細に刻まれており、バランスがよかった。

これらデータから一般化を図ることは多少難があるが、鳩間島同様、黒島においても人々が真壁型を嗜好する傾向は確認され、いわゆる開鐘型といわれる真壁型が広く伝播している状況が確認された。

以上のことも含め、黒島・鳩間所在・由来する三線については、次のように5点に総括することができる。

- ① 鳩間島・黒島の三線のうち、由緒伝来が古い三線は、島を離れた元島民らによって、保管される傾向にある。
- ② 同島では、古三線における首里王府から派遣された役人が現地妻を娶り、その子孫に伝承された三線で、置県前後に伝承されたものが確認された。
- ③ 両島においても、調査した範囲において、沖縄本島の人々の間でも嗜好性が高い真壁型三線が好まれる傾向が確認できた。
- ④ 三線製作においては、鳩間島には製作者の伝承が確認されなかったが、リュウキュウコクタンの産地とされる黒島では、明治期～大正期にかけて島に三線製作者がいたとの伝承が確認された。今回の調査でその一つが確認され、真壁型で細棹の特徴を持っている。
- ⑤ 黒島では結願祭などの前に渋張り三線の胴の張り替えをした。反故紙（和紙）を用い、芭蕉の渋汁によって何枚も重ねたものを、ゆっくり乾かすために水甕が用いられた。底に水を張って甕に渋張りの三線をいれ、一定の湿度のもとで乾燥させる渋張り胴の製作技術が伝承されていることを確認した。

謝 辞

今回の調査を行うに当たり、次の方々に調査協力、ご指導をいただいた。心から感謝申し上げる。通司建次氏（鳩間公民館長）、大城正明氏（石垣在鳩間郷友会長）、鳩間真吉氏（石垣市）、友利英雄氏（石垣市）、浦崎宜浩氏（石垣市）、宮良哲夫（黒島）島仲氏（黒島）、若月元樹氏（黒島研究所）、當山善堂氏（那覇市）

註 記

- 註1 沖縄県教育庁文化財課発行『平成26年度文化行政要覧』によると、平成26年度末の県市町村指定の三線は、県指定有形文化財が20挺、市町村指定文化財が4挺（うるま市3挺、嘉手納町1挺）である。
- 註2 王国時代の文献『球陽』には、三線職人を「三線打」と記載されており、南風原、三線主取の知念、名工真壁、与那城など名前がでてくる。明治時代にはすでにその型名が確認されている。当時すでに、古い三線の型順に名工の名前に因み、南風原型、知念大工型、真壁型、与那城型など三線の型の名称化がなされている。
- 註3 戦後、琉球古典音楽家の池宮喜輝によって、移民地の米国ハワイやロサンゼルスなどの悉皆的な調査が実施され、昭和29年に『琉球三味線寶鑑』として上梓された。それぞれの三線ごとに由緒来歴などが記されており、ハワイに5千挺の三線が確認されている。
- 註4 三線を家宝とする考えは王国時代からあった。相伝の物として遺言状に記されてもおり、基本的には門外不出のもので、公に展示される機会はなかった。戦前、展示などの公にされた嚆矢が、昭和8年の読売新聞社によって東京府美術館で開催された「日本名寶展」であった。その際、旧琉球王家尚家の出品資料のうち三線が2挺出品された。また、県内では昭和14年の首里城南殿で開催された江戸与那の三線供養祭が初めてであった。歴史学者の東恩納寛惇が東京の古書市で、島津家に献上された一名「江戸与那」を見つけ、沖縄へ里帰りさせた。その際に、当時沖縄教育会附設郷土博物館長の島袋源一郎と協力して、首里那覇の名器20数挺とともに供養祭と銘うって展示公開を行っている。
- 註5 黒島研究所は黒島唯一の博物館類似施設である。ウミガメの生態展示をはじめ海の生物や黒島の漁労習俗などを展示する施設で、NPO法人が昭和50年に設立、運営している。
- 註6 1900（明治33）年の10月25日付けの「琉球新報」の記事には、「三味線大工の同盟」で三線職人の低賃金を是正するために組合として新聞

広告を掲示した。三線製作組合として作業賃の定額化をめざし、三線職人の地位と生活改善の向上をめざそうと試みている。

参考文献

- 沖縄県教育委員会，2015，『平成26年度 沖縄県文化行政要覧』。
- 沖縄県立博物館・美術館，2013，『三線のチカラー 形の美と音の妙一』。
- 池宮喜輝，1951，『琉球三味線寶鑑』。
- 沖縄県教育委員会，1995，『沖縄の三線』。